

マドコオフスマ考

工藤浩

マドコオフスマとは、神話的には天孫降臨の際ニニギノミコトを包んだ着衣若しくは寝具を指し、祭儀の面では大嘗祭の悠紀殿・主基殿に設えられた神座の名称である。両者を結びつけた解釈が広く行われており、その背景には、記・紀神話を祭儀から派生したものと考え、天孫降臨神話もその成立基盤としての大嘗祭の起源神話と見做されてきた研究史がある。こうした捉え方を見直すべき点が指摘され、天孫降臨神話と大嘗祭との関係も再検討されてはいるが、『日本書紀』の現行の注釈書を見ると、ほぼ例外なく神話の中のマドコオフスマを大嘗祭のそれと大なり小なり関連付けて理解する状況が見られる。ここでは、マドコオフスマについて、祭儀と神話各々に於ける位相を見定めつつ、その意味する内容の変遷を辿ってみることにする。

—

『日本書紀』神代下第九段所載の天孫降臨神話は、本文に第一〇八の一書が付されている。マドコオフスマは、次頁の表に示す

ように司令神をタカミムスヒとする紀本文と第六・第四の一書に現れる。

日本古典全書を除いた現在の注釈書は、何れもこのマドコオフスマを説明する際に大嘗祭に言及している。これは、周知のように折口信夫の提示した所謂マドコオフスマ論⁽¹⁾に基づく解釈である。即位する天皇が寝所に籠り天皇霊を身に付けることを大嘗祭の本義と捉え、その新帝の褥裳こそがニニギノミコトの纏ったマドコオフスマであるとするものである。

近年、加茂正典⁽²⁾によって、折口のマドコオフスマ論の先行説の所在が明らかにされている。加茂は、折口説を天孫降臨神話を大嘗祭の祭儀神話と見做す「天孫降臨神話由来説」と、大嘗宮神座の寝具・御衾をマドコオフスマと解釈する「真床覆衾説」に分けて捉える。前者「天孫降臨神話由来説」は、忌部正通⁽³⁾が「斎庭之穗」(第九段一書第二、「卜定田」)(第十段一書第三、吉田兼俱⁽⁴⁾が「八重席(薦)」(第十段本文・一書第二)のように、大嘗祭儀に神代紀の記載と一致する語彙が見られることに注目した論である。「斎

表1

総合	アマテラス系		タカミムスヒ系			系統	
	第一書	第二書	第四一書	第六一書	紀本文		
記	アマテラス	アマテラス	タカミムスヒ	タカミムスヒ	タカミムスヒ	司令神	
	ホノニニギ ← オシホミミ	ホノニニギ ← オシホミミ	ホノニニギ	ホノニニギ	ホノニニギ	降臨神	
			真床覆衾に包まれる	真床覆衾に包まれる	真床追衾に包まれる	降臨の様態	
	流多気	千穂触峯	筑紫日向高	日向襲高千穂 日二上	日向襲高千穂 日二上	降臨地	
	アマツクメ			アメノオシヒ アメクシツノ オホクメ		随伴神	
	オモヒカネ タヂカラヲ イハトワケ	アメノコヤネ フトダマ	アメノコヤネ フトダマ	アメノコヤネ フトダマ		石屋戸系	
	三種神宝	三種神宝	宝鏡			神宝	
	宝鏡奉斎	天壤無窮	同床同殿	斎庭稲穂		神勅	
	サルタヒコ	サルタヒコ				伊勢神宮	
	外宮之渡会	上 伊勢之狭長田五十鈴川				鎮座	

西條勉 『古事記と王家の系譜学』 より

庭之穗」「卜定田」は第九段天孫降臨神話の要素だが、「八重席（薦）」は第十段の海神宮訪問神話に属しており、「天孫降臨神話由来説」の名称は、厳密を期すならば「天孫降臨・海神宮訪問神話由来説」とすべきであろう。

後者「真床覆衾説」は、鈴木重胤を嚆矢とする。「冕服」を身に着けて、「高座」に就いた新帝を、「命婦二人」が覆う「御帳」がマドコオフスマだというのである。「高座」とは高御座のことであり、そこへ新帝が就くのは、重胤も指摘するように「天皇即位儀」であつて、ここまでの部分は「大嘗祭」について論じていないことが確かである。更に続けて、皇太神宮・荒祭宮・度會宮・多賀宮のご神体を覆う装束をマドコオフスマの遺制とし、大嘗祭で八重疊の上に奉る衾も玉体を覆うという用途から同様に考え、坂枕の下に敷く衾も同じものだと捉えているのである。そこで注目されるのは、飯田武郷が、

栗田寛説に。儀式大嘗の神御に寢具を供へ。天皇の御にも同く寢具あり。また諸社の神坐にも。衾あり枕あること。往々見えたるは。みな上古の體ときこえたり。此寢具を供ふることは。天孫降臨の時。真床覆衾の遺風にやあらむと云り。さも有へし。⁶⁾

の如く、栗田寛もマドコオフスマ説を発表していたことを述べる点である。加茂は、栗田説の出典を不明としながら、鈴木重胤説を踏襲したものである可能性を示唆している。⁷⁾ 管見の限りでも、栗田寛の著作にマドコオフスマに関する明確な記述は見出すことはできないが、『神祇志料附考』には坂枕に関する以下のような

記述が見られる。

また大嘗會に用ふる坂枕と云はいかなるにかと疑ひてありしが、(中略)日本紀私記に、師説古以蔭爲枕云高之眼目。須流故、欲言高之始。有此言乎とみえ、冠辭考に、或傳にこの大嘗會の神床の八重疊の下に、其薦枕をかひ敷て高くすといへり、然れば枕の方、高くて床の上斜なれば、坂枕てふ名も有歟是ぞ上代の臥床のさまなるべければ、こも枕高し⁸⁾てふも、此意ならんかとも覺ゆといはれたり、

大嘗祭の「坂枕」とは、「大嘗會の神床の八重疊の下に」敷く「薦枕」の謂いであることを、『冠辭考』を引いて説いているのである。『冠辭考』を見ると、割注に「坂枕」を「大嘗宮の神坐の料」と明記した上で、「或傳」として日本紀私記の師説の大嘗宮についてのおだりを「この神床の八重疊の下に、其枕をかひ敷きて高くすといへり」と紹介している。ところが、『釋日本紀』卷二十四の武烈祀歌謡の注釈には、

私記曰。師説曰。古以蔭爲枕。云高之服用湏。故欲言高之始有此言乎。¹⁰⁾

のように、「薦枕」が枕詞として「高」に掛かる理由を説明しているに過ぎず、大嘗祭と結びつける記述は一切ないことがわかる。眞淵は、八重疊をマドコオフスマと同一だと考えてはおらず、その点は栗田も同様なのである。飯田武郷は、鈴木重胤『日本書紀傳』が提示した「真床覆衾説」を参照し、栗田寛『神祇志料附考』に引かれた坂枕・薦枕の説を敷衍して、栗田寛説として「天孫降臨の時。真床覆衾の遺風にやあらむと云り。」と解したの

だと考えられる。

以上から、天孫降臨神話のマドコオフスマを大嘗祭の神座の名称とする捉え方は、資料上は加茂の指摘どおり『日本書紀傳』が最初であることが確認された。重胤は、即位儀の高御座の覆いをマドコオフスマの遺制とする見解を先ず示した上で、それを従来の「天孫降臨・海神官訪問神話由来説」で論じられていた、大嘗祭の坂枕・八重畳の敷設に用いる薦枕の謂いでもあるという思考回路で「真床覆衾説」を提示したのである。

二

大嘗祭は、天武・持統朝に即位儀礼の一環として位置づけられたことが知られているが、施行細則は平安中期に作られた『延喜式』に一卷を充てて記載されている。中世になると室町末期から戦国時代にかけての朝廷の窮乏や応仁の乱（応仁元年¹⁴⁶⁷～文明九年¹⁴⁷⁷）によって実施が延期され、遂には大嘗祭が行われない状態が生じてしまう。再び大嘗祭が復興されるのは近世に入ってから、貞観四年（¹⁰⁸⁷）に一二三代東山天皇、一代措いて享保二十年（¹⁷³⁵）の一・五代桜町天皇の即位に際してであった。復興は、五撰家に数えられる一條家の尽力によったが、一・二代靈元天皇の遺志を強く反映したものであった。

大嘗祭の史料は、先述の『延喜式』の他に『儀式』『江家次第』『西宮記』『北山抄』などの儀式書が知られるが、何れを見てもマドコオフスマに関する記述を見出すことはできない。所謂マドコオフスマの秘儀を大嘗祭の本義とする説は、一条兼良『江次第鈔』

「中和院神今食」条所引の『新儀式』の割注に「内裏式云」として書かれた「縫殿寮供寝具、天皇御^レ之」の記事を、唯一の根拠としてきた。即ち、天皇が縫殿寮の敷いた寝具に包まることが解¹²するのである。この記事には、史料性に対する疑義が呈されており、「御^レ之」は天皇の神嘉殿乃至は寝具を供する場への出御と解すべきとの指摘もある。何れにせよ、寝具がマドコオフスマであるとは書かれていない点は看過できないのである。そこで、前掲の表1を再度見た場合に、司令神の問題とは別に、マドコオフスマは三品が「初期穀靈信仰の段階」とする紀本文と第六・第四の一書の所伝にしか出現せずに、大嘗祭が新帝即位儀礼として実施され始めた他ならぬ天武・持統朝の段階の所伝と捉える紀一書第一¹³や記では全くその影を潜めてしまっていることがわかる。こうした状況を勘案するならば、マドコオフスマは大嘗祭の本来の要素ではなかったと見るのが合理的なことになる。

記・紀神話は、平安朝になって初めて祭儀と関連付けられるのであり、神武天皇即位記事に大嘗祭の実施が明記されるのは、大同二年（⁸⁰⁷）成立の『古語拾遺』が最初だと指摘される。当該神話の「齋庭之穗」が、先ず大嘗祭と関連付けられたことを示す確実な史料は、『夫木和歌抄』卷三十一に収められた正安三年（¹³⁰¹）後二条天皇の即位に際して藤原兼仲の詠んだ、

君が代は 安のこほりの みつきもの ゆにはの稲穂 つき
そはしむる
の歌であるが、

大問云、以齋訓湯如何、先師申云、湯者、潔齋之義也、大

皆会由貴次、盖此謂也。

という『釋日本紀』の「齋庭」の解釈には、穿った見方をすればそうした意識の萌芽が看取できる可能性を加茂は指摘している⁽¹⁷⁾。しかし、ことマドコオフスマについては、これを大嘗祭の神座とする概念の存在を示す史料は、鈴木重胤の『日本書紀傳』以前には溯り得ない。それまでは、大嘗祭の神座は、吉田神道の兼俱以来海神宮神話に現れる「八重疊」と結び付けた解釈がなされていたのである⁽¹⁸⁾。従って、悠紀・主基殿に設えられた神座にマドコオフスマの呼称が与えられたのは、近世に復興された大嘗祭の以降である可能性が高いものと考えられる。文献で辿ることのできる所謂「真床覆衾説」は、鈴木重胤、飯田武郷のような後期の国学者の著述に限られる。大嘗祭は、十七〜八世紀という国学勃興の時期に復興されたため、そこに初期の国学者が関与したことも充分に想定することもできよう。

三

マドコオフスマを大嘗祭の神座の名称とする観念は、大嘗祭が中世の戦乱によって途絶えた時期を過ぎて、近世の復興の後に生じた可能性を見てきた。従って、天孫降臨神話に於けるマドコオフスマは、大嘗祭とは切り離して解釈するのが適切だと言ふことになる。『日本書紀』の注釈史の上では、マドコオフスマの大嘗祭と関連付けない解釈は、1. 寢床・神衾を覆う衾⁽¹⁹⁾、2. 御帳⁽²⁰⁾、3. 天孫を包む襦⁽²¹⁾、4. 胞衣に分類される。

先述のように天孫降臨神話のマドコオフスマは、『古事記』に

はなく司令神をタカミムスヒ一神とする『日本書紀』第九段の本
文、一書第四・同第六の三つの所伝にのみ、降臨するニギギの着
衣として記載されている。司令神にアマテラスが加わり、降臨神
ニギギがオシホミミから交代することになった途端に、それは見
られなくなる。この点について西條勉は、マドコオフスマに包ま
れることの意義を西郷信綱の論を引いて「胎児への回帰による再
誕⁽²¹⁾」とし、降臨神の交代によってニギ誕生のモチーフが加わる
ので、マドコオフスマは不要になったものと説明する。しかしな
がら溝口睦子の指摘にあるように、マドコオフスマを含んだ三つ
の所伝の何れにも、三品彰英の言うようなニギギが嬰兒であるこ
とを示す記述は認められない。溝口は、マドコオフスマが除外さ
れる理由については、疑問を呈しながらも西條の説に従う立場を
採るが、そもそも天孫降臨神話には儀礼的な死と再生を暗示する
「胎児への回帰による再誕」が不可欠だとする三品以来の見解に
は再考の必要があろう。『日本書紀』では、あくまで成人の俣の
状態で降臨するニギギを包むのがマドコオフスマであつて、それ
を嬰兒の象徴とはなし得ない点を先ず確認すべきではないか。
それでは、ニギギの纏うマドコオフスマを神話的にはどう解釈
したらよいのであろうか。降臨神話では、しばしば神が船に乗る
ことがある。国譲り条では、『古事記』で建御雷神に副えられた
天鳥船神は、人格化された建御雷神の降臨の乗り物とも解され、
『日本書紀』では事代主神のもとへの使者稻背脛を運んだ熊野諸
手船の亦名天鳥船も、水平方向にはあるが神を乗せて空を飛ん
でいる。中でも最も著名なものは『日本書紀』卷第三、『先代舊

『事本紀』卷第三「天神本紀」に記載された、物部氏の祖ニギハヤヒの河内への降臨伝承である。及川智早は、『萬葉集』には、「天雲に磐舟浮かべ 艦に舳に ま權しじ貫き い漕ぎつつ 国見しせして 天降りまし 払ひ平げ」（卷十九・四二五四）の如く、

物部氏に対抗意識を持っていた筈の大神の伴氏に属する家持の作歌にニギハヤヒ降臨伝承の要素である「磐舟」が詠み込まれている点に注目する。集中には、他にも「ひさかたの 天の探女が 磐船の 泊てし高津は あせにけるかも」（卷三・二九二）のように、

表2

「床」「牀」の用例

番号	箇所	用例	訓
1	神代下第九段本文	眞床追衾	マドコオフスマ
2	同	同床	オナジキトコ
3	同 一書第四	眞床覆衾	マドコオフスマ
4	同 一書第六	眞床覆衾	マドコオフスマ
5	神代下第十段一書第四	三床	ミツノユカ
6	同	邊床	ホトリノユカ
7	同	中床	ナカノユカ
8	同	内床	ウチノユカ
9	同	眞床覆衾	マドコオフスマ
10	同	眞床覆衾	マドコオフスマ
11	綏靖即位前	大牀	オホトコ
12	神功皇后摂政5年3月	微叱許智之床	ミシコチノトコ
13	仁徳4年3月	床藤	ミユカミマシキ
14	履中即位前	玉床	ミユカミマシキ
15	同	床頭	ミユカノハシ
16	雄略14年4月	避床而	ミユカラサリテ
17	継体元年正月	胡床	アグラ
18	同 8年正月	臥床	トコニフシテ
19	欽明15年12月	胡床	アグラ
20	敏達14年3月	胡床	アグラ
21	舒明即位前	胡床	アグラ
22	皇極2年9月	床側	ミモトノカタハラ
23	孝徳白雉元年是歲	難波吉士胡床	▲ナニハノキシアグラ
24	天智3年12月	床席	シキキ
25	同 10年10月	胡床	アグラ
26	天武元年6月	三宅連石床	▲ミヤケノムラジイハトコ
27	同 9年7月	三宅連石床	▲ミヤケノムラジイハトコ

訓は日本古典文學大系『日本書紀』による。

磐船が天の探女の高津への降臨の乗り物とされる例があり、『続歌林良材集』所引『津國風土記』逸文にも同様の觀念が見られることを指摘して、一般の神は天降る時に船に乗るが、天孫であるニニギの場合は船ではなく「大嘗祭儀礼の要素を取り入れた」マドコオフスマを用いて、天孫の差別化を図ろうとする『日本書紀』の構想を読み取るべきことを論じている。²⁸ マドコオフスマを最初から大嘗祭の要素とする点には従えないが、首肯すべき見解と思われる。

それでは、マドコオフスマが船に代わる天孫降臨の手段として考えられたのはなぜであろうか。『日本書紀』には「床」「牀」の用例が、表2に示したように二七箇所見られる。

▲を付した人名の三例、胡坐の五例、22「床側」ミモノノカタハラ、24「床席」シキキを一先ず除外すると、この文字は現代語と同様に建物の構造物としてのユカ（5・6・7・8・13・14・15・16の八例）と寝所を表すトコ（1・2・3・4・9・10・11・12・18の九例）とに訓み分けられている。後者に属するマドコオフスマは、「衾」に覆われたある種の特種な寝床と考えることができそうである。そうした場合、『古事記』に二例ある神意を聞くために天子の就く「神牀」が想起される。疫病の流行した折に、崇神天皇が就いて大物主大神のお告げを受けて祟りを鎮め、安康天皇がそこで昼寝した時の不用意な寝物語を、皇后の連れ子の目弱王に聞かれて命を落とすことになったのが「神牀」である。『日本書紀』には「神牀」の用例は見られない。眉輪王による安康天皇殺害の経緯の詳細は「神牀」を含めて記載されていない。

ない。崇神紀七年には、天皇が神浅茅原に八十萬神を集めた卜占を行って大物主神の神託を得た後、更に潔斎した夜に『古事記』と同様に大物主神の夢のお告げで疫病を収束させる方法を聞いているが、ここでも「神牀」には言及されていない。同じく崇神紀の四十八年条を見ると、天皇が豊城命と活目尊の二人の皇子に詔して、潔斎の後に見た夢の内容によって後継者を決めるという『古事記』に見られない記事が載せられており、『日本書紀』にも天子やその皇子の見る夢に特別の意味を認める意識があったことがわかる。こうした天子が夢のお告げを受けるため神聖な寝床に就く慣習と、遠く離れたところへ行く夢を見て一瞬にして目覚める日常的な経験²⁹などから、天孫たるニニギが他界へ移動する手段として、マドコオフスマは神話的に発想されたのではあるまいか。

四

ところで、『日本書紀』には第九段の天孫降臨条の他に、第十段の海神宮訪問神話にもマドコオフスマが登場している。この段では本文にはマドコオフスマは見られず、一書第四にのみ二箇所現れる。ここにマドコオフスマが登場することに関しても、折口信夫以来大嘗祭と関連付けた解釈がなされてきた。折口は、一書第四以外の所伝に書かれるシホツチの与えたマナシカタマの小船の存在に注目して、これを大嘗祭で用いられる神への供物を納める容器であり、神の依り代でもある竹籠と同じものだと考え、海神宮訪問神話を大嘗祭の起源神話と解すべきことを論じており、

諸氏がこれに従っている。大嘗祭の竹籠は、服属した隼人が製作・貢納したものであるのは確かだが、あくまで幣帛を盛るための容器に過ぎず、祭儀の中で神の依り代としての機能を果たしているとは認め難い。マドコオフスマについては、海神宮条では一書第四にだけしか記されておらず、本文はもとより他の一書にも全く触れられていない特殊な要素である点を先ず問題としなければならぬ。

神代紀下第十段の本文は、第一～第四の一書の内容に基づいて新たに選定されたものと説かれてきた。³²⁾一書の配列に関して、殊に語句の共通した最も本文に近い一書第一から順に、第二～四は徐々に疎遠になると考えられている。³³⁾最後に配された一書

表3

古事記	海神国への移動		地上への移動		海神宮に入る際の敷物			トヨタマビメの出産		
	幫助者	手段	幫助者	手段	場所	姿	子を覆う物	場所	姿	子を覆う物
日本書紀 第十段本文	鹽土老翁	無目籠	／	／	八重席薦	海邊	龍	草	／	／
一書第一	鹽土老翁	一云無目堅間 大目鹿籠	海神	大鰐	／	海邊	八尋大熊鰐	／	／	／
一書第二	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
一書第三	鹽土老翁	無目堅間小船	海神	一尋鰐魚	海驢皮八重	海邊	八尋大鰐	／	／	／
一書第四	鹽筒老翁	一尋鰐魚	／	／	三床(邊床・中床・内床) 眞床覆衾 美智皮疊八重亦純疊八重	／	／	草及眞床覆衾	／	／
鹽椎神	無目勝間小船	海神	一尋和邇	美智皮疊八重亦純疊八重	海邊	八尋和邇	／	／	／	／

第四は、兄火酢芹命が山幸利、弟火折尊が海幸利とされ兄弟関係が逆であったり、海神は瓊を授けるのではなく三度睡きすること、風招かぜまきの教唆のあることなど、最も本文からは遠い特殊な所伝として性格づけられている。³⁴⁾当該一書に対するこうした認識の妥当性は、検討を要すると思われる。というのも、先にもふれた海幸・山幸の兄弟関係の逆転という大きな問題の他に、弟火折尊の名称が「天孫」、「彦火火出見尊」、「火折尊」と二転三転する点などからも、特殊な異伝としてではなく、未整理な点を多く含んだ一書と見るべきだからである。このことは、海神国への往路の移動の記述のありようからも確認できる。

地上(葦原中國)から海神国へ向かう往路は、海神宮の門の前

の好井しみの場面で始まる第二の一書は別として、問題の第四の一書を除けば『古事記』も含めた四種の伝承が一致して、シホツチノヲヂから得たマナシカタマ（ノヲブネ）・オホマノアラコと称する籠に乗って移動している。海神国から地上への復路の移動手段は、紀本文・一書第二・一書第四には記載がなく、他には大鰐（紀一書第二）一尋鰐魚（紀一書第三）一尋和邇（記）の如く全てワニとされている。従って、マナシカタマで海神国に至り、ワニの背に乗って葦原中国へ戻るという大筋が、海神宮訪問神話に対する共通理解として存したことが想定できる。此れに対して一書第四の場合は、往路に他では復路の乗り物である筈の一尋鰐魚が現れる。しかもシホツチノヲヂが指し示した八尋鰐が鰐魚の策によって一尋鰐に替わるといふワンクツションを置いた上で、他の所伝に共通して見られるシホツチノヲヂとの結びつきを逸脱して、マナシカタマのあるべき位置にそのワニが割り込んでゐる。復路では移動手段への言及がない点なども、混乱乃至未整理の状態と見るべきであろう。神代紀上冒頭の第一、二段の神代七代条の一書には、原資料がそのままの形で採られてはおらず、明らかに『日本書紀』の編者によって統合化の手が加えられてゐる。³⁵当該段の第四の一書についても、同様のことが行われた結果、このような不整合が生じたのではないだろうか。

それでは、第四の一書は本来どのような形を採っていたのだろうか。この一書にだけにしか見られないマドコオフスマは、第十段では特殊な要素と言ふことになる。二箇所のうち、天孫が葦原中国から海神国へ移動した直後の海神宮へ入る際が先、トヨタ

マビメがウガヤフキアヘズを産む際が後の用例である。後者の、出産の場所についてこの一書は、「出で来りて、當に産うまむとする時に」とあるだけで、「果して先の期の如く、其の女弟玉依姫を將ゐて、直に風波を冒して海邊に來到着る」（紀本文）、「風濤壯からむ日を以て、海邊に出で到着らむ」、「豊玉姫、果して其の言の如く來至る」（紀一書第二）、「天孫の胤を、豈海の中に産むべけむや。故、産まむ時には、必ず君が處に就でむ。如し我が為に産屋を海邊に造りて」、「豊玉姫、自らに、大龜に馭りて、女弟玉依姫を將ゐて、海を光して、來到る」（二書第三）のように、他の所伝には例外なく記される、波浪を乗り越えて地上に戻った記述が見られない。トヨタマビメの出産の前には、火折尊が海神の教えに従って兄を懲らしめる記事が書かれている。他の所伝に、兒が生まれた場所として一致して記される「海邊」が、兄への復讐が行われた場所として、文脈上の位置を変えて記されているのも、先に見た鰐に対するこの一書の扱いと合致している。このような曖昧な記述からは、トヨタマビメが海神国から葦原中国へ移動した直後に出産したようにも受け取られる。

はじめの用例に目を転ずるなら、他の所伝の八重席薦（本文）、海驢皮八重（紀一書第三）、美智皮疊八重（記）が、この一書のマドコオフスマに対応している。第四の一書では、海神の用意した三床の「邊床」「中床」に続く最後の「内床」でマドコオフスマの上に寛坐しているのを見て、海神が「天神の孫」と悟っている。天孫の象徴としてのマドコオフスマは、海神が用意したのではなく、地上から携えられてきたものだと考えるべきである。「三床」

「マドコオフスマ」のように、數物と思しき要素が重複しているものもさることながら、數物を「八重」に重ねるといふ要素がない点でも、この一書の内容の他の所伝からの逸脱ぶりは顕著であると言ふべきだろう。

マドコオフスマの後の方の用例では、トヨタマビメが恨んで別離の言葉を発した後に、「草及眞床覆衾」で生まれた兒を包んでいる。ここでも、マドコオフスマがどのような経緯で現れたのが文脈上明確にされてはいないが、出産の場所、即ち他の所伝に「海濱」と記される地上にあつたのではなく、トヨタマビメによつて生まれた兒とともに海神国から齎されたものと考えるのが自然であろう。注目すべきは、それを身に着けるのが、ウガヤフキアヘズの名は明記されないが、他ならぬ「天孫」「皇孫」の兒である点であろう。

未整理・不整合を含んだ第十段第四の一書ではあるが、マドコオフスマは、「天孫」「皇孫」としてのホヨリからその兒へと引き継がれており、葦原中国と海神国との間の移動の直後に現れる点は何を意味するのであろうか。見てきた点を踏まえていま一度表3を見ると、マドコオフスマによつて火折尊が海神宮に移動するのが、本来の形として浮かんでこよう。このような異伝を一書として『日本書紀』で取り上げる際に、他の所伝に共通するシホツチの教唆という一般的要素との整合性への配慮から、マドコオフスマの登場する場所は海神宮入り口の三床の最後の「内床」の上へ移されたのだと考える。更に、マナシカタマを、同じく人口に膾炙した復路のワニといふ要素に置き換えてシホツチワニとい

う特異な結びつきを生じさせたのであろう。復路について言えば、同様に兒がマドコオフスマに包まれて葦原中国に戻る話柄を採っていたが、兒の生まれた地を葦原中国の「海邊」とする一般的な所伝の影響、若しくは拘束によつて、トヨタマビメが地上に赴いて兒を草とマドコオフスマで包むという形に改めたと思われる。この一書だけが兒の生まれた場所を曖昧にしている理由は、兒の誕生が本来は海神国であつたためだと理解されよう。かくして、海神宮訪問神話についても、マドコオフスマによつて天孫が異界へ移動するという概念が存した可能性を、この一書から窺い知ることができるのである。

五

マドコオフスマは、天孫降臨神話に於いて天孫の他界への移動手段として神話的に発想され、その概念は海神宮訪問神話にも適用されたものと考えられる。平安朝に入つて大嘗祭は、神祇官によつて祭儀としての体裁が整えられ、次第の中で用いる神饌や調度に神話の名称が与えられた。これが「天孫降臨神話・海神宮訪問神話由来説」である。室町期に一旦は途絶えた大嘗祭が、二百年を経て近世に復興されるが、祭儀の次第を復元するには既に勃興していた国学が寄与したものと考えられる。国学者による記・紀神話の解釈を参照しつつ、大嘗祭が再整備されてゆく流れの中で、大嘗宮正殿の神座がマドコオフスマと呼称されるに至つた。こうして「眞床覆衾説」は、鈴木重胤から飯田武郷を経て、折口信夫へと受け継がれたのである。

『日本書紀』のマドコオフスマは、大嘗祭とは無縁であつて、儀礼的な死と再生を意味する胎児への回帰を暗示してはいないと見るべきである。従つて、天孫降臨神話の諸伝の中で、降臨神の交替を伴う場合は、嬰兒の象徴としてのマドコオフスマは不要となるという考えは適切とは言えないのである。私見によれば、これは司令神と随伴神との関わりで解すべき問題である。即ち、タカミムスヒの司令による降臨は、マドコオフスマに包まれた二ニギノミコト単独で果たされ、随伴者が居たとしても『日本書紀』第九段第四の一書のように、せいぜい東征系の二神に限られていた。アマテラスを新たな司令神に据えたことで随伴神に加わつた多数の石屋戸系の神々までも、そこに二ニギが包まれた状態で従えることを不自然だとする編者の判断からマドコオフスマは捨象され、降臨の様態には触れない形が採られたのであろう。

- 註(1) 折口信夫「大嘗祭の本義」『折口信夫全集』第三卷 中央公論社
 (2) 加茂正典「天孫降臨神話と大嘗祭」『日本古代即位儀礼史の研究』思文閣出版 平成一一年
 (3) 忌部正通「神代卷口決」(貞治元年1368『日本書紀註釈』中 神道大系編纂会 昭和六〇年) 九六頁。なお、「斎庭之穂」については相澤安「新論」(『文政八年1825』、「卜定田」は一條兼良『日本書紀纂』康成年間1455~1457)がそれぞれ従う。
 (4) 吉田兼俱『日本書紀神代卷抄』(明応~文久年間1492~1504)、『神書聞塵』(文明三年1471)、吉田兼右『日本書紀問書』(永祿十年1567)が従う。

- (5) 鈴木重胤『日本書紀傳』(文久二年1862、翌年に没するまで加筆)
 (6) 飯田武郷『日本書紀通釋』(明治三三年1899、翌年飯田は没して出

版は明治三五1902~四二年1909 大鑑閣 七六七~七六八頁

- (7) 註(2)前掲書三〇〇頁
 (8) 栗田寛「神祇志料附考」上巻。(明治六年1873序) 皇朝秘笈刊行會 昭和二年 二六~二七頁
 (9) 賀茂眞淵『冠辭考』(宝暦七年1757『賀茂眞淵全集』第八卷 続群書類従刊行會 昭和五三年) 一〇〇~一〇一頁
 (10) 卜部兼方「釋日本紀」卷二十四
 (11) 一條兼良『江次第鈔』(永享一〇年1438『続々群書類従』第六法部) 七一~四頁
 (12) 岡田精司「大化前代の服属儀礼と新嘗」『古代王権の祭祀と神話』塙書房 昭和四五年
 (13) 黒崎輝人「大嘗祭試論―神供儀礼―における神と王」『日本思想史研究』第一一号 昭和四四年
 (14) 岡田莊司「大嘗の祭り」学生社 平成二年
 (15) 三品彰英「古代祭祀と穀霊信仰」(『三品彰英論文集』第五卷 平凡社 昭和四八年 四〇~五頁)
 (16) 神野志隆光「古代天皇神話論」若草書房 平成一一年
 (17) 註(2)前掲書二八五頁
 (18) 註(4)前掲書
 (19) 註(10)『釋日本紀』、『日本書紀纂疏』、荷田春滿『日本書紀劄記』(寶永四年1707)、河村秀根『書紀集解』(天明五年1785自序)
 (20) 註(3)『神代卷口決』、清原宣賢『神代卷抄』(天文五年1536、山崎闇斎「神代紀垂加翁講義」、吉川惟足「神代卷惟足講義」。なお、兼右『日本書紀問書』(永祿一〇年1567)は、1・2の折衷案を探る。
 (21) 平田篤胤『古史傳』(文政八年1825)、橘守部『稷威道別』(天保一五年1844)
 (22) 真野時綱『古今神学類編』。なお白川家「伯家部類」は3・4の折衷案を探る。
 (23) 西郷信綱「大嘗祭の構造」『古事記研究』 未来社 昭和四八年
 (24) 西條勉「古事記と王家の承譜学」(笠間書院 平成一七年) 一六

○頁

- (25) 溝口睦子『王権神話の二元構造』(吉川弘文館 平成二二年)
- (26) 三品彰英『日本神話論』(『三品彰英論文集』第一卷 平凡社 昭和四五年)
- (27) 註(26)前掲書に註(24)(25)などが従う。
- (28) 及川智早「天降る神は天磐船に乗るか」『帝塚山学院大学日本文学研究』第二十七巻 平成八年
- (29) 福島秋穂は、こうした夢の経験をもとに古代人が鳥と靈魂とを一体視するようになったことを論ずる。「古代の心」『記紀神話伝説の研究』(六興出版 昭和六三年) 四八七〜四八八頁
- (30) 折口信夫「鬘籠の話」『折口信夫全集』第二巻 中央公論社 二〇〇〜二〇一頁
- (31) 松前健『日本神話の形成』(塙書房 昭和四五年)、次田真幸『日

本神話の構造と成立』(明治書院 昭和六〇年)、新編日本古典文学全集『日本書紀①』(小学館 平成六年)などの注釈書が従う。

- (32) 藤井信夫「古事記上巻の成立過程(二)」(『日本文学士院紀要』第十四巻第三号 昭和三一年)、太田善磨『古代日本文学思潮論』III 桜楓社 昭和三七年
- (33) 註(32)前掲書、論文
- (34) 藤井註(32)前掲論文二二二頁
- (35) 中村啓信「神代紀の一書をどう見るか―神代七代条をめぐる―」『日本書紀の基礎的研究』高科書店 平成二二年

※本稿は、平成二二年度古事記学会九月例会での口頭発表に基づくものである。